

高等学校 芸術科（美術）

1 改訂の趣旨及び要点

改訂の基本的な考え方

- ・感性や想像力等を働かせて、表現したり鑑賞したりする資質・能力を相互に関連させながら育成できるよう、内容の改善を図る。
- ・生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての理解を深める学習の充実を図る。
- ・高等学校芸術科（美術，工芸）において表現と鑑賞の学習に共通に必要な資質・能力を〔共通事項〕として示す。

目標の改善

芸術科（美術Ⅰ）で育成を目指す資質・能力（下線部）を三つの柱で整理しています。

美術の幅広い創造活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、美的体験を重ね、**生活や社会の中の美術や美術文化と幅広く関わる資質・能力**を次のとおり育成することを目指す。

知識・技能の習得

対象や事象を捉える造形的な視点について理解を深めるとともに、意図に応じて表現方法を創意工夫し、創造的に表すことができるようにする。

思考力・判断力・表現力等の育成

造形的なよさや美しさ、表現の意図と創造的な工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生成し創造的に発想し構想を練ったり、価値意識をもって美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。

学びに向かう力・人間性等の涵養

主体的に美術の幅広い創造活動に取り組み、生涯にわたり美術を愛好する心情を育むとともに、感性を高め、美術文化に親しみ、心豊かな生活や社会を創造していく態度を養う。

学習内容の改善・充実

☆育成する資質・能力を一層明確にするため、表現領域を改善

「(1)絵画・彫刻」、「(2)デザイン」、「(3)映像メディア表現」の各分野における各事項を、発想や構想に関する資質・能力と技能に関する資質・能力の二つの観点から整理しました。

☆「B鑑賞」の内容を、アの「美術作品など」とイの「美術の働きや美術文化」に関する事項の二つに分けて整理。

アでは、特に発想や構想に関する資質・能力と鑑賞に関する資質・能力とを総合的に働かせて「思考力、判断力、表現力等」を育成することを重視しています。

☆〔共通事項〕の新設

生徒が多様な視点から造形を豊かに捉えることができるよう、造形的な視点を豊かにするために必要な知識を〔共通事項〕として新設しました。

☆言語活動の充実

〔共通事項〕に示す事項を視点に、アイデアスケッチなどで構想を練ったり、言葉などで考えを整理したりすることや、作品について批評し合う活動などを取り入れるようにするなどの言語活動の充実を図れるようにしました。

☆美術Ⅲの内容の充実

「A表現」及び「B鑑賞」相互の関連を図りながら学習が深められるよう、美術Ⅲにおいても「A表現」と「B鑑賞」の両領域の内容を必ず扱うこととしました。

内容の取扱い(美術Ⅰ)等

- ・内容の「A 表現」の(1)絵画・彫刻については、絵画と彫刻のいずれかを選択したり一体的に扱ったりすることができます。また(2)デザイン (3) 映像メディア表現についてはいずれかを選択して扱うことができます。その際、**感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現と、目的や機能などを考えた表現の学習が調和的に行えるようにします。**
 - ・例えば、絵画・彫刻と映像メディア表現を選択したときに、どちらも感じ取ったことや考えたことの表現活動や題材にならないようにするということです。
- その場合は、映像メディア表現の分野で、「目的や機能などについて考えた表現」を学ぶ内容とする必要があります。

2 高等学校芸術科（美術）における授業づくりのポイント

ポイント①：「造形的な見方・考え方」を働かせる

造形的な 見方・考え方	感性や美意識、想像力を働かせ、対象や事象を 造形的な視点 で捉え、自分としての意味や価値をつくりだすこと
------------------------	---

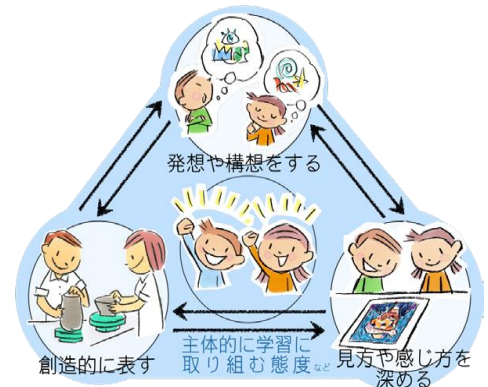
「見方・考え方」とは、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という各教科ならではの物事を捉える視点や考え方の中で、深い学びの軸となるものです。生徒が美術の学習の中で「造形的な見方・考え方」を働かせ、今後生活していく上で「造形的な見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることに、教員の専門性が求められています。授業計画を立てる際は、生徒が「造形的な見方・考え方」を働かせる場面をどのように設定していくかを考えながら、計画することが重要です。

⇒**造形的な視点**とは、造形を豊かに捉える多様な視点であり、①形や色彩、材料や光などの造形の要素に着目してそれらの働きを捉えたり(木を見る視点)、②全体に着目して造形的な特徴などからイメージを捉えたりする視点(森を見る視点)のことです。

同じものを見てもよさや美しさを感じる人もいれば、そうでない人もいるように、造形的な視点がなければ、身の回りにある形や色彩、材料や光などの働きや美しさに気付くことができず、通り過ぎてしまいます。造形的な視点を持つことで、生徒は漠然と見ているだけでは気付かなかった身近な生活の中にあるよさや美しさを感じ取ることができるようになり、感性を十分に育てていこう。

ポイント②：「A 表現」と「B 鑑賞」の関連を図る

今回の改訂では、表現したり鑑賞したりする資質、能力を相互に関連させながら育成することを一層重視しています。例えば、鑑賞の学習において、作者がどのようにして主題を生み出し、表現の工夫をしているのかについて考えることが、自分の作品を制作する中で主題を生み出したり、構想を練る時の力を高めることとなります。表現と鑑賞の指導の関連を図る際には、表現のための参考資料として表面的に作品を扱うのではなく、相互に関連する**造形的な視点**を軸にそれぞれの資質、能力を高められるようにすることが大切です。



ポイント③：美術科における主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

主体的・対話的で深い学びの視点に立ち、活動と学びの関係性や、活動を通して何が身に付いたのかという観点から、学習・指導の改善・充実を進めることが求められます。

	引き出したい生徒の姿と指導の工夫（例）
主体的な学び	<p>自己の生成した主題や対象の見方を大切にして、主体的に取り組む学習活動となるか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主題を生成する場面、構想する場面、創造的な技能を働かせる場面、鑑賞の場面のそれぞれにおいて、形や色彩などの造形の要素の働きなどに意識を向けさせて考えさせるようにする。 ・その学習で育む資質・能力を生徒が正しく理解できるよう、ねらいを明示し、見通しを立てて自己の活動に取り組めるようにする。また、学習活動を自ら振り返り、次の学びにつなげていけるような場面を設定する。
対話的な学び	<p>表現や鑑賞の能力を育成するために、他者と対話し交流する場面をどこに設定するか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・形や色彩などの造形の要素の働きを理解したうえで、美術作品や互いの作品について批評し合い、討論する場面を設定する。 ・自分と他者の見方や感じ方の相違を理解し、自分の見方や感じ方をさらに深めるための言語活動を充実させる。
深い学び	<p>「造形的な見方・考え方」を自在に働かせることができるか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主体的に学ぶ意欲を高め、豊かに主題を生成し発想や構想をし、創造的な技能を働かせてつくりだす「表現」の能力と、美術作品や文化遺産などを様々な観点から鑑賞して、そのよさや美しさを味わう「鑑賞」の能力を相互に関連させ、学習が深まるようにする。

3 高等学校 芸術科（美術）実践事例

単元(題材)の流れ

次	時間	主な学習内容・学習活動	学習の流れ
第1次	第1時 (本時)	言葉のイメージを抽象的に表現する。	
	第2時 (本時)	言葉のイメージを、軽やかに重点を置いた抽象立体にする。	
第2次	第3時	主題にあった表現方法を工夫し、材料や用具を工夫して抽象的な立体表現の構想を練る。	
	第4時	主題にあった表現方法を工夫し、材料や用具を工夫して抽象的に立体表現する。	

深い学びを実現するためのポイント

生徒の思考を深め・結び・つなぐ題材構成

実践事例では、言葉や形、他者との交流からイメージや考えを広げ、それらを抽出したり、まとめる時間を保証し、生徒が段階を追って無理なく、表現を深めていくことができる指導の工夫がされています。主体的に学習を進めるためには、①既知の学習について振り返り、既知の知識や経験を次の学習に活用できるようにすること ②導入部分で題材全体の見通しを理解し、「この題材で何を学ぶのか、何ができるようになるのか」を教員だけではなく、生徒が理解できていることも、主体的な学習を支える大切な要素となります。

「A 表現」と「B 鑑賞」を相互に関連させ、学びを深める

実践事例では、見方や感じ方を共有したり、批評する活動を通して、自分の感じたイメージや作品について、自分の考えを整理したり、他者の見方などから自分の見方や感じ方を深めることができるような場面が多数設けられています。作品のよさや価値を批評し合う言語活動を通して、自分の気付かなかった作品のよさや美しさを発見し、新しい価値を見出すような学びとなっています。言語活動を行う際は、「何のために言語活動を行うのか」という事を明確にして、形式的に行ったり、〔共通事項〕に示す視点が十分でないままの単なる話合い活動に終始しないように留意する必要があります。

発想や構想を深めるための言語活動の充実

実践事例では、教員と生徒、生徒同士のやり取りを通して自分の見方や感じ方の重要性を実感し、アイデアの形成、整理、再構築を行う場面が多数設けられています。言葉や形を手掛かりに、自分で発想や構想を練る活動(内化)と批評し合う鑑賞活動を取り入れ(外化)、他者の意見も参考に作品を完成させる、という内化と外化の往還を実践することで、主体的、対話的で深い学びの実現をめざしています。

授業実践の振り返り…チェックポイント！

- その題材を通して「何を学ぶのか」を明確にもち、生徒と共有していましたか。
- 生徒が自分で主題を生成したり、構想したりする場面はありましたか。
- 生徒の感性や美意識、想像力が働く場面が、たくさんありましたか。
- 生徒同士でお互いの見方や感じ方、考えを交流する場面はありましたか。そのときの雰囲気は、それぞれの見方や価値を認めあう温かい雰囲気だったでしょうか。
- 生徒が造形的な視点を意識することができる授業展開となっていましたか。
- 「A 表現」で学んだ内容と「B 鑑賞」で学んだ内容が相互に関連し、深い学びとなっていましたか。

基本編

本時の指導計画

- ◆科目・学年 美術Ⅲ・3年
- ◆単元名（題材名）『抽象表現』に挑戦する
- ◆学習指導要領(平成30年告示)との関連 「A 表現」(1) 絵画・彫刻、「B 鑑賞」、〔共通事項〕
- ◆本時の目標

- ・「おどる」という言葉からイメージを膨らませて表現することに関心をもち、主題を生成して、構想を練ったり、イメージに形を与えることができる。
- ・「おどる」という言葉から感性や想像力を働かせて、平面から立体へと形態を変容させ、宙に浮いた軽やかな抽象彫刻に挑戦し、創造的な表現の構想を練ることができる。
- ・人によってさまざまな感じ方、考え方があるという事を知り、批評し合う活動を通して作品やイメージの理解を深めることができる。

◆主な学習の流れ（1、2時間目/全4時間）

	学習活動	指導上の留意事項
1 時 間 目	『抽象表現』に挑戦しよう。	
	【導入】 ●学習内容を確認する。	・これまでの学習の振り返りと本時の説明。
	【展開1】 ●アイデアを出す。 個人	・メモ用紙と油性マジックを配り「おどる」と聞いて浮かんだことをメモ用紙に1～2個書き出させる
	【展開2】 ●アイデアを共有する。 個人↔全体	・メモ用紙を回収し、その内容を黒板に書き出す。教師もイメージを追加したり、説明を加えたりする。
	【制作1】 ●ドローイング 個人	・四つ切画用紙いっぱい、筆ペンを使って「おどる」をテーマにドローイングを描かせる。筆ペンのインクがなくなるまで描き続ける。 (どんな「おどる」をイメージして描くか、しっかりテーマを決めさせて描き始める)
【制作2】 ●ドローイングから形を選び透明フィルムに写し取る。 個人	・描いたドローイングの中から好きな線や「おどる」が表現できていると感じた形を3つ選ばせる。 選んだ線や形を透明フィルム1枚につき1つの形を写し取る。写し取る画材は油性マジック(太・黒)を使う。	
2 時 間 目	【鑑賞1】 ●透明フィルムに写し取った形を鑑賞し合う。 個人↔全体	・ドローイングの形を写し取った透明フィルム3枚をセットにして、右回りで隣の席の人に渡す。 ・隣の人から受け取った作品を眺め、魅力のある線や形、「おどる」になっていると感じた部分に油性マジック(極細)で○やチェック、コメント等を書かせる。
	【制作3】 ●透明フィルム3枚をバランスよく重ねて「おどる」を立体的に再構成する。 個人↔全体	・書き込んでもらったことも参考にしながら、写し取った透明フィルム3枚をバランスよく重ねて「おどる」を立体的に再構成させる。 配置が決まったら、針金を突き刺して立体的に固定する。 →固定した「立体ドローイング」を天井から吊るした紐に吊るし、鑑賞する。
	【鑑賞2】 ●互いの作品を鑑賞する。 個人↔全体	・各自に付箋3枚を渡し、「一番気に入った作品」「二番目に気に入った作品」「『おどる』が感じられる作品」にそれぞれ違う色の付箋を貼らせる。 ・白紙の紙を配り、今日の授業に対して自由に感想を書く。

